↑東京ドーム3個分という広大な敷地を備えた、宇都宮市清原工業団地内の「JT 北関東工場」。大型の製造機械が目にも止まらぬ早さで紙巻きたばこ製品を生み出し続けるなか、従業員の姿は驚くほど少ない。ピースをはじめとしたJT製品の高い品質は、最先端のFAがその一翼を担っていた。たばこ葉の香りが漂う工場内を見学する機会に恵まれたゲストたちは時には息を飲み、時には感嘆を洩らしていた

↑カンファレンス会場脇にはピース各製品を自由に試喫できる喫煙スペースが設けられ、ゲストは愛用の銘柄と異なるピースの味わいを楽しんでいた

↑工場見学後は「森のフレンチ AOYAGI」でコースディナー。生演奏が流れる中、ゲストはピースの香りとともに楽しむ極上のひとときを堪能した

「Peace Factory Tour」に密着

紙巻きたばこはこうして作られる―。全自動化が進む最新工場のいま

2019年12月6日、70年以上の歴史を持つたばこ『ピース』の銘柄数種を製造する栃木県宇都宮市のJT北関東工場にて、ピース愛好家を招く工場見学イベントが開催された。当日の様子をレポートする

ピースの香りと味わいが70年以上変わらない理由

今回のイベントに招かれたのは、事前抽選で選ばれたピース愛好家7組12名。工場の紹介やピースの歴史についての解説の後、ピース開発責任者でありマスターブレンダーの小澤義美氏から託されたビデオメッセージが披露された。

「ピースの象徴である100%バージニア葉から生み出される、変わらぬ豊かな香りと深い味わい、上質感を極め続ける」

要約だが、ゲストに語りかけるメッセージには、70年以上の歴史を誇るピースの現在と未来を支え続けようという確固たる意志がみなぎっていた。日頃からピースに親しんでいるゲストにとっても、このメッセージは力強く頼もしく、自らの選択を支えるものと映ったに違いない。

とはいえ、たばこ葉は自然の恵みだ。収穫年や畑の場所、気候によって味わいは常に変化する。ましてやピースは黄色種のバージニア葉のみで作られる銘柄だ。他の銘柄のように、黄色種・バーレー種・オリエント種の配合を替えて味わいを微調整する手は使えない。なのになぜピースはつねにピースなのか。たばこ葉の個性を日々確認し、ピースの味わいを保ち続ける現場の匠、工場ブレンダーの橋本氏は、箱を開けたときの香り、火を点けないたばこを嗅いだときの香り、そして喫味から微妙な違いを感じ取るのだという。

橋本「開発側も工場側も、たばこ葉の個性を定期的に確認して、ピースの味わいを保ち続けています。また黄色種は熱に弱く、紙での巻き上げなどあらゆる工程で厳密な温度管理を徹底しなければ喫味が変わってしまいます。見学頂いた皆様は、工場内に配置される人の数が少ないと感じるかもしれませんが、実は全行程の細部まで人が緻密に目を光らせているのです」

北関東工場の機械は、なんと1分間に1万6000本ものたばこを製造するのだという。流れていくたばこが残像にしか見えないスピードには驚くばかりで、各材料があっという間に見慣れたたばこの箱へと変わっていく様子に、ゲストからは感嘆が漏れることしきりだった。工場見学用の衣装で記念写真を撮り、1月29日から限定発売された「ピース・リトルシガー」をひと足早く味わったゲストは、こぼれる笑顔とともにピースの魅力に魅了され、ピース一色の1日を過したのだった。